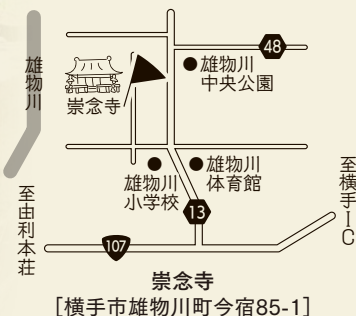




さまざまなストーリーを秘めた地域の街角を探訪します。



現役時代のスタルピン



MVP副賞のスクーターを整備するスタルピンと久仁恵さん。今は崇念寺の車庫に保管されている



スタルピンやきそば

れ、5角形の目玉焼きをホームベース、ソーセージをバット、青のりを芝生に見立てた寺に近い滝沢食堂のスタルピンやきそばも根強い人気だ。

激動の時代を駆け抜けた青い目の大エースは、雪深い雄物川の地で愛妻と共に安らかに眠っている。

スタルピンの墓の前に立つ高橋大我さん



数奇の大エース、永遠の安息の地に

スタルピンの墓 [横手市雄物川町、崇念寺]

日本プロ野球初の300勝(通算303勝)投手で野球殿堂入りしたロシア生まれのヴィクトル・スタルピン(1916〜57年)。

ロシア革命のおおりで両親と共に亡命、巨人軍のエースとして活躍しながら戦中はスパイ容疑をかけられ球界を追放されて、軽井沢に幽閉されたことも。その数奇な運命が一昨年亡くなった西木正明さんの直木賞作品「凍れる瞳」にも描かれた昭和の大投手は、愛妻・久仁恵(ロシア名・タインヤ)さんと共に久仁恵さんの実家の崇念寺に眠る。

「昔前は、住民からもなぜスタルピンの墓が?と聞かれたものでした」と語るのは、スタルピンの義弟で12代住職の高橋大我さん(92)。大我さんや姉の久仁恵さんら6人きょうだいは、ロシア革命勃発直後に出兵した日本軍の通訳だった先代住職の義雄さんと、動乱の中で彼と知り合い結婚したロシア人のトリーシャさんとの間に生まれた。

久仁恵さんがスタルピンと結婚したのは終戦4年後。大戦終盤、ソ連の侵攻を理由とした球界追放を経て、戦後パ・リーグへ復帰していたスタルピンに当時暮らしていた東京で見初められ、お茶の水のロシア正教会

「聖ニコライ堂」で挙式。長女、次女に恵まれ、先妻の子とともに育てていた。

しかし、スタルピンは引退2年後の57年に自動車事故により急逝。青山葬儀所で野球葬が営まれた後、手厚い供養を望む久仁恵さんの思いに応え義雄さんは崇念寺において近くの近親寺院と共に仏式で葬儀を営み「至誠院釈完闍不退位」の法名を記した墓標を建てて埋葬。一周忌の法要には家族が勢ぞろいした。

現在の墓は、33回忌の89年にスタルピンの長女・ナターシャさんの意向で建立。大我さんがデザインした白球に見立てた丸い石がのった墓にはスタルピンと久仁恵さん(71年死去)の遺骨が納められている。

「スタルピンは私を『たいちゃん』



スタルピンの一周忌法要参列の後、墓標前に並んだ家族

と呼び、上京すると知り合いの芸能人らに「僕の弟」と紹介してくれました」と大我さん。「パ・リーグMVPの副賞で、大事にしていたスクーターの後部座席に私を乗せてくれたことも」。思

い出のスクーターは寺の車庫にある。墓には、県内外から多くの人が訪れる。中にはプロ野球関係者も。野球大会シーズンには勝利祈願だろうか親子連れが手を合わせ、使い込んだボールを供えることも。雄物川スタルピン杯550歳野球大会が毎年行わ